

第2章 調査された遺構と遺物

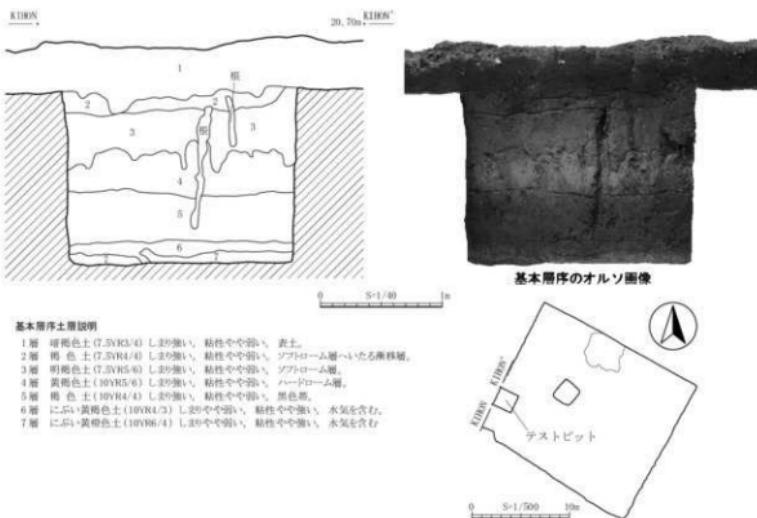
今回の調査では古墳時代終末期と考えられる小形の竪穴建物跡1棟が調査された。出土遺物の総数は77点で、その総重量は2,375gであった。内訳は弥生時代～古墳時代前期と思われる土器が1点で11g、古墳時代終末期の土器が1点で184g、奈良・平安時代と考えられる土器が73点で1,935g、近世の陶器が1点で101g、近現代の陶器類が2点で144gであった。

本遺跡の基本層序は、1層が表土、2層がソフトローム層へいたる漸移層、3層がソフトローム層、4層がハードローム層、5層が黒色帶である。3層は立川ロームⅢ層、4層は立川ロームⅣ～V層、5層は立川ロームⅦ・Ⅸ層に対応すると考えられ、AT層は確認されなかった。ここまでよく見られる堆積状況だが、6層から様相が大きく変わる。6層にはにぶい黄褐色土が堆積しており、しかもかなり水気を含んでしまって弱く、7層も同様に水気を含んでしまっての弱い層であった。なお、遺構確認面は2～3層とした。

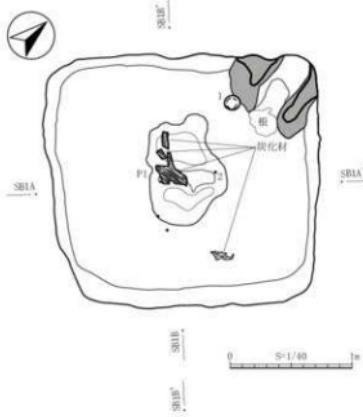
第1節 古墳時代

1号竪穴建物跡

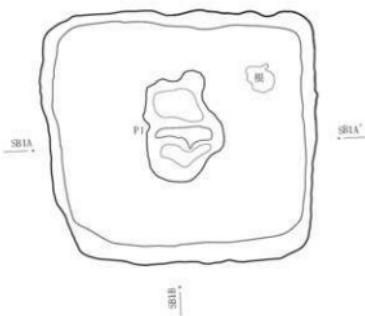
時期：古墳時代終末期 検出面：2層 平面形態：不整隅丸方形 規模：長軸長2.24m 短軸長2.06m 深さ0.36m 埋土堆積状況：根によって一部乱されていたが、埋土はレンズ状に堆



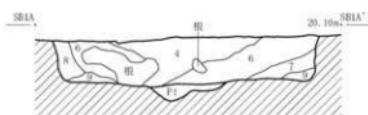
第5図 基本層序



竪穴建物跡の完掘とカマド完掘のオルソ画像を合成

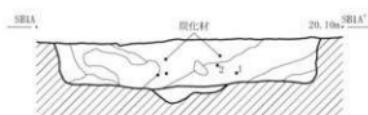


竪穴建物跡完掘のオルソ画像

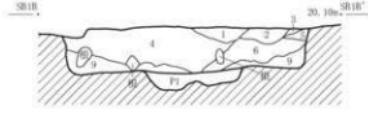


1号竖穴建物跡土層説明

- 1 層 塗褐色土 (7.5YR3/4) しまりやや強い、粘性やや弱い、ロームブロック中量、ローム粒子微量含む。
- 2 層 塗褐色土 (7.5YR4/4) しまり中、粘性やや弱い、ロームブロック・粒子微量含む。
- 3 層 地 他 土 (7.5YR4/4) しまり中、粘性やや弱い、ローム土体層。
- 4 層 塗褐色土 (7.5YR3/4) しまり中、粘性やや弱い、ロームブロック・粒子微量、炭化物少量含む。
- 5 層 塗褐色土 (7.5YR3/2) しまり中、ロームブロック中量含む。



- 6 層 塗褐色土 (7.5YR3/4) しまり中、粘性やや弱い、ロームブロック・粒子少量、炭化物少量含む。

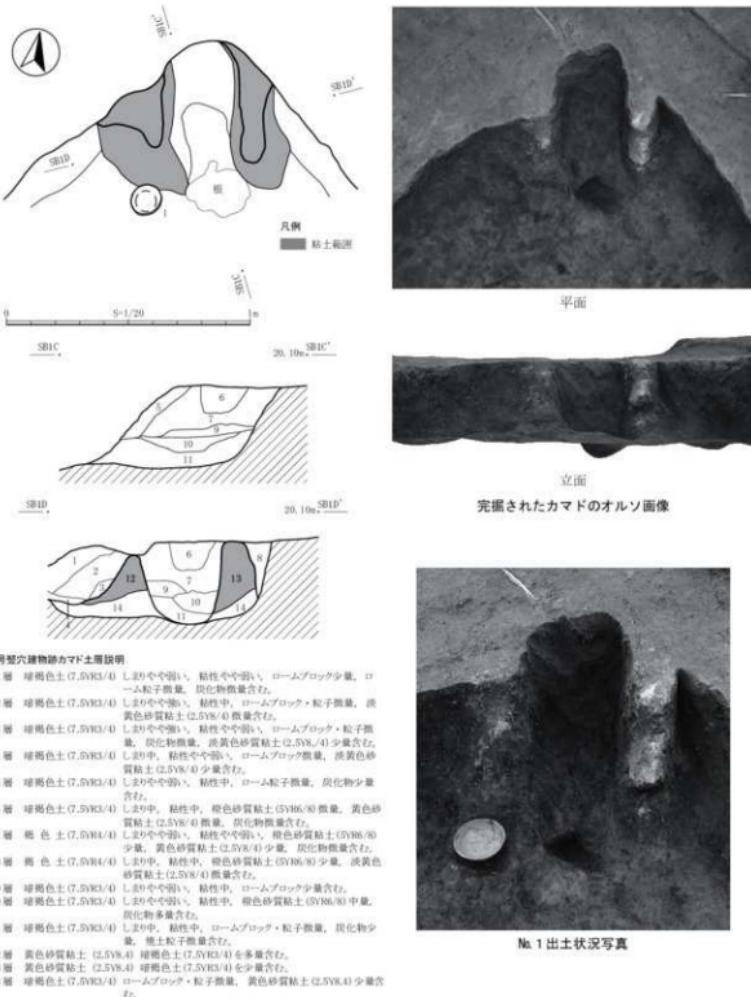


- 7 层 塗褐色土 (7.5YR3/3) しまり中、粘性中、ロームブロック・粒子少量、炭化物少量含む。

- 8 层 地 他 土 (7.5YR4/3) しまりやや強い、粘性やや弱い、ロームブロック中量、ローム粒子微量含む。

- 9 层 塗褐色土 (7.5YR3/4) しまり中、粘性やや弱い、ロームブロック多量、ローム粒子少量含む。

第6図 1号竪穴建物跡（1）



第7図 1号竪穴建物跡（2）

積していたため、自然堆積によって本遺構は埋まったと考えられる。構造：カマドが1基、ピットが1基検出された。P 1は不整形であることから攪乱のようにも思われたが、セクションの観察から自然堆積による埋土に覆わっていたことから、本遺構に伴うピットと判断された。床

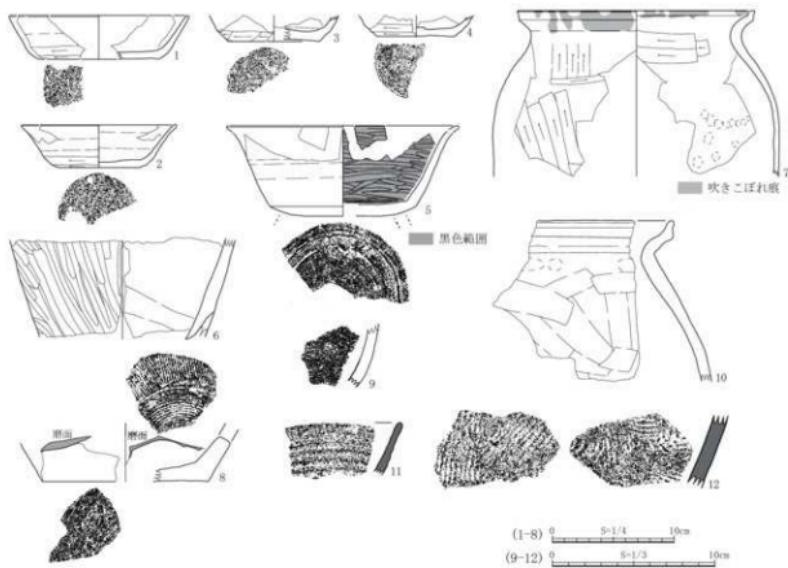


第8図 1号竪穴建物跡（3）

第4表 1号竪穴建物跡出土土器観察表

遺物 No.	時代 背景	遺存状態	寸法	色調	文様・成形・調整等	胎土	出土層位	備考
1	古墳終末 土師器坏	100%	外径：13.3 cm 底径：10.4 cm 遺存高：3.6 cm	外表面：褐色(7.5YR6/6), 明漠褐色(10YR6/6) 内面：褐色(7.5YR6/6)	外表面：ヘラケヅリ 内面：指ナゲ	長石, 石英, 角閃石	床面上 床面直上 に付着	内外面に二ヶ所 び油脂が焼化し たと思われるもの が付着
2	奈良・平安 須恵器坏	口縁部 破片	—	外表面：灰褐色(7.5YR6/1), 灰色(7.5YR5/1) 内面：灰褐色(7.5YR6/1)	外表面：ロクハ	石英, 角閃石	埋土	

面で硬化面は確認されなかった。 **カマド**：カマドは竪穴建物跡の北側角に竪穴建物跡構築時の掘り込みを壊すことなく構築されていた。カマドの裾部は黄色砂質粘土に暗褐色土を混ぜて構築されており、とくに西側の裾部は黄色砂質粘土よりも暗褐色土の方が多いほどであった。また、裾部の下には暗褐色土が盛られていた。裾部の粘土が焼けて橙色になったものも確認されたため、カマドで火を焚いていたことは間違いないが、燃焼部と考えられる焼けた面は確認されなかった。 **出土遺物点数**：古墳時代土師器1点、奈良・平安時代の可能性がある土師器1点、奈良・平安時代須恵器3点。 **出土遺物重量**：古墳時代土師器184g、奈良・平安時代の可能性がある土師器11g、奈良・平安時代須恵器16g。 **遺物出土状況**：本遺構から出土した5点の遺物のうち3点を測量で取り上げた。No.1はカマドの裾部の端から出土し、その他の遺物は埋土中から出土した。No.1は床面よりやや高い位置から出土したように断面図では見えるが、カマドの裾部は暗褐色土を盛った上に粘土を貼りつけて構築されており、No.1はこの暗褐色土直上で確認されたことから、当時の生活面から出土したと考えてよいだろう。その他の遺物は埋土中から出土し、かつ時代も古墳時代終末期ではなく、奈良・平安時代と考えられる。なお、埋土中からは炭化材も見つかった。 **遺物**：No.1の内外面には油脂が焼けて炭化したものやコゲが付着している。No.2は奈良・平安時代の須恵器坏である。 **備考**：確認調査時に奈良・平安時代の須恵器坏が出土したことから、当初は奈良・平安時代と本遺構は推測され



第9図 遺構外出土遺物（1）



第10図 遺構外出土遺物（2）

第5表 遺構外出土遺物観察表

遺物 No.	時期 と種類	遺存状態	寸法	色調	成形・調整等	胎土	出土位置	備考
1 平安 土師器坏	口縁～底部 遺存率40%	口径:(14.6)cm 底:(4.0)cm 高:3.6cm	外面:褐色(3.5V10E.6) 内面:褐色(3.5V10E.6)	外面:ロクロ、ヘラケズリ、 凹断へラ切 内面:ロクロ	長石、角閃石	搅乱1		
2 平安 土師器坏	口縁～底部 遺存率40%	口径:(12.6)cm 底:(8.0)cm 高:3.5cm	外面:褐色(3.5V10E.6)、褐色(7.5V10E.6) 内面:褐色(7.5V10E.6)	外面:ロクロ、ヘラケズリ、凹断 へラ切 内面:ロクロ	長石、石英、角 閃石	搅乱1	外外面にスジ付 る。	
3 平安 土師器坏	底～底部 遺存率20%	径:(7.4)cm 遺存高:2.1cm	外面:褐色(7.5V10E.6) 内面:褐色(7.5V10E.6)	外面:ロクロ、ヘラケズリ、 凹断系切 内面:ロクロ	長石、石英	搅乱1		
4 平安 土師器坏	底～底部 遺存率20%	径:6.0cm 遺存高:1.7cm	外面:褐色(7.5V10E.6) 内面:褐色(7.5V10E.6)	外面:ロクロ、ヘラケズリ、凹断 系切 内面:ロクロ	長石、石英	搅乱1		
5 平安 有台塊	口縁～底部 遺存率30%	口径:(18.9)cm 遺存高:(7.4)cm	外面:褐色(7.5V10E.6) 内面:褐色(7.5V10E.6)	外面:ロクロ、塊部底面凹化～ へラ切 内面:ロクロ、ミガキ	長石、石英、角 閃石、海綿骨針 等	搅乱1	外面に被熱燒物 り、海綿骨針含 む。	
6 平安 土師器破片	胴部 遺存率20%	遺存高:8.9cm	外面:明赤褐色(2.5V10E.6) 内面:褐色(3.5V10E.6)	外面:へラケズリ 内面:下鉢ナデ	長石、石英、角 閃石	搅乱1		
7 平安 土師器長颈瓶	口縁～胴部 遺存率30%	口径:(19.6)cm 總高:最大径:(23.4)cm 遺存高:(13.6)cm	外面:黄褐色(10V10C.6)、明褐色(10V10 6.0)、にぶい紫褐色(10V10E.6) 内面:褐色(7.5V10E.6)	外面:ヘラケズリ、 内面:ヘラケズリ、相溶接痕	長石、石英、角 閃石	搅乱1	口縫部内外面に ふきこぼれ板。	
8 近世 軸突瓦筒瓦	胴部～底部 遺存率20%	径:(13.6)cm 遺存高:(3.6)cm	外面:暗灰(7.5V10A.7)、褐色(7.5V10A.7) 内面:風化(7.5V10A.2)	外面:ロクロ 内面:ロクロ、ハケ	石英	表土		
9 平安後期 ～ 古墳前期 鉢	口縁～胴部 破片	—	外面:赤褐色(10V10A.4) 内面:褐色(3.5V10E.6)	外面:ミガキ、摩耗 内面:ミガキ	シャモット、長石 、石英、角閃石	搅乱1		
10 平安 土師器長颈瓶	口縁～胴部 破片	—	外面:褐色(7.5V10E.6) 内面:黄褐色(10V10C.6)	内面:ヘラナデ	滑石、長石	搅乱1		
11 平安 土師器坏	口縁部 破片	—	外面:褐灰(7.5S)	外面:ロクロ	長石、石英	搅乱1	大輪の石英を多 量に含む。	
12 平安 灰陶器壺	胴部 破片	—	外面:灰色(3.5V5.1)	外面:タタキ	長石、石英	搅乱1		

たが、本調査の結果、古墳時代終末期に位置づけが変更された。

第2節 遺構外出土遺物

今回の調査では搅乱1としたところから多量の遺物が出土し、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる鉢、9世紀以降と考えられる土師器の坏や内面黒色処理の有台塊、長胴甕、須恵器の坏、近現代の養鶏で使われていた偽卵を実測図や写真で掲載した。これだけまとまつた遺物が出土していることから、平安時代の集落跡が本遺跡には存在していると考えられる。

第3章　まとめ

神明前遺跡の調査は過去に一度小規模なものが行なわれたのみで（八千代市教育委員会2017），本遺跡にいつの時期のどのような遺構・遺物があるのかはわかつていなかった。今回の調査結果は，こうした状況を脱し，古墳時代終末期から平安時代にかけての集落跡が本遺跡に存在することを強く示唆するものであった。また，弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられると考えられる土器も1点出土していることから，本遺跡のどこかに当該期の集落跡が存在する可能性も指摘できる。地形的特徴から推測すると，北に位置する舌状台地にそうした集落跡の中心が存在したのではないだろうか。

＜参考・引用文献＞

- 松本礼子 2001 「下総国府の土器編年」 松本太郎編『下総国府跡 国府台遺跡緊急確認調査報告書』市川市教育委員会 pp.73-117
八千代市教育委員会編 2017 『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成28年度』八千代市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし しんめいまえいせきびーちてん							
書名	千葉県八千代市 神明前遺跡b地点							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	轟 直行							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地2 TEL 047(483)1151 代表							
発行年月日	西暦2019年11月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんめいまえいせきびーちてん 神明前遺跡b地点	島田台字神明前	12221	36	35度 46分 03秒	140度 05分 33秒	2019.8.20 ～ 2019.9.13	271.93m ² (上層)	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
神明前遺跡b地点	包蔵地 集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代	古墳時代終末期 堅穴建物跡1棟	弥生時代後期～古墳時代前期 土器、古墳時代終末期土師器、 奈良・平安時代土師器・須恵器				
要約	<p>今回の調査によって古墳時代終末期に位置づけられるカマドが付設された小型の堅穴建物跡1棟が見つかったこと、そして9世紀以降に位置づけられると考えられる土師器・須恵器が塊乱から多量に発見されたことから、古墳時代終末期から平安時代にかけての集落跡が存在する可能性が、さわめて高いことを明らかにすことができた。また、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられると考えられる跡と思われる土器片も発見されたことから、当該時期の集落跡も本遺跡には存在する可能性がある。</p> <p>神明前遺跡では過去に一度調査が行なわれたが、時代を確実に決定できるような遺構・遺物は発見されず、本遺跡にいつの時代のどんな遺構・遺物が存在するのか明らかにならなかった。しかし、今回の調査によって神明前遺跡の様相がおぼろげながらも見えてきたと言えよう。</p>							

千葉県八千代市 神明前遺跡 b 地点 一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

発 行 日 令和元年11月29日
 編 集 八千代市教育委員会
 〒 276-0045 八千代市大和田 138-2
 T E L 047-483-1151(代表)
 発 行 株式会社正栄
 印 刷 株式会社先都

